



コロナ禍は拡大していくようです。仕事や学校も生活も対応して困難になるばかりです。自然災害の困難も辛いですが、感染症の流行も大きな災害です。日本では、735年に天然痘の大流行で人口の3割が死に、1858年にはコレラの為に江戸だけで3万人が死んだということです。ペストは542年から200年間も流行して地中海地方の人口の4分の1が死亡して東ローマ帝国を衰退させ、14世紀にはヨーロッパで7500万人が死んで黒死病として恐れられました。1918年のスペイン風邪では世界で4000万人が死に、終息までに3年かかりました。1957年のアジア風邪で2000万人、1968年の香港風邪で100万人が死んでおられます。新型コロナウイルス感染症はこれまで300万人以上の死者が出ていますが、変異型も頻発しており数年は収まりそうもありません。

歴史を振り返ると、このように感染症は繰り返されておりますが、ビジネスや旅行のグローバル化で、これまでにない感染の速さ大きさを感じます。黒死病流行の際に医師がつけたカラスのくちばしのようなマスクを見たことがありますが、そこには予防の為のハープなどが入っていました。ともかく、医師たちが奮闘していたことがわかります。

感染症の恐ろしさや警告が飛び交いますが、注目すべきは生き延びた人たちです。特効薬もなくワクチンもない状況の中で、感染しなかったのか、感染しても治ったのか、ともかく免疫力が強かったのです。知識や技術が深まり、医療も進歩していますが、免疫力には敵わないのです。殺菌・除菌スプレーも大流行です。抗体も感染によって造られるのではなくワクチンによる疑似感染によって造られるようになり、さらにワクチン自体が遺伝子で造られるようになりました。未来映画で、未知の病原菌やウイルスに冒されて死滅する人類の様子を観ると、科学自体の発達が対応できないウイルスを作り出してしまふ恐れも危惧します。

今回のコロナ禍は、そのようなプロセスを経ての蔓延ではないかと穿った見方もできます。果たして生き残るのは、注意深い生活をしている人なのか、免疫力の強い人なのか、医療ケアを十分に受けられる人なのか。人知を尽くした対処に対して、ウイルスが巧妙に変異しているのも、映画のような恐ろしさを感じます。仕事も社会も変異してしまいました。私達は人格を持った存在として、映画のヒーローのように立ち向かわなければなりません。と思わされています。

事務長 柏崎久雄

感染症で受診される方へ

発熱やくしゃみ・咳症状のある方、水ぼうそう等伝染性疾患のこどもの方は、入口、待合室・診察室、会計の流れが異なります。また、トイレ後のハンドソープによる手洗いに協力ください。

★ 入口

正面入口横の中央通路のインターホンを押して下さい。

★ 待合室・診察室

2階の、第二待合室です。

★ 会計

疾患によっては、廊下会計となる場合があります。

ヨーゼフのキャンペーン

タイムリリース C1000 with B+P、
ポップ・ヘム鉄、ポップ・ビタミンCPサワー
6月11日(金)まで

聖書を読む会 5/11(火)13時40分

- * 新型コロナウイルスの感染が警戒されています。院内に入る前にマスクを付け、入り口に置いてあるアルコール消毒薬で手を十分に殺菌してください。周りの人にご配慮ください。トイレは待合室毎に指定の所をご利用ください。
- * 熱のある方や前日まで発熱のあった方、熱が無くても味覚嗅覚に異常のある方は、14時〜16時の時間帯にホームページからのネット予約、ウェブ問診をお済ませの上、予約時間にご来院下さい。来院時は裏のインターホンでお知らせ下さい。
- * 予約診療を来院による普通診療と並行して受け付けています。ウェブ問診も始まっています。受診時に記入する問診票を事前入力できます。オンライン診療も行っております。ホームページ下のタブより申し込んでください。電話再診もご利用ください。
- * 新型コロナウイルスの接種対象で希望の方は、5月下旬以降にお問い合わせください。とりあえず火曜と土曜の午後には人数限定で行います。健康状態の把握が必要な為、当院に通院している4月末時点でカルテのある方限定です。公表しておりません。
- * かかりつけ医カードを発行しています。詳細は受付に。
- * 病児保育は、他院で受診しても、当院院長の診察を必須条件として利用していただけます。
- * ㈱ヨーゼフでは、グルテンフリー・カゼインフリーの5日間セットをお得な価格で提供しました。

< 発達障害の治療について (I) >

マリヤ・クリニックは、現代医学に分子整合栄養医学 (Orthomolecular Medicine) を加味して診療をおこなっております。これはノーベル化学賞を 1954 年に受賞したライナス・ポーリング博士が始めた医学で、生物を構成する分子の乱れが病気の発症に関与しているとの研究から始まった医学です。身体にはホメオスターシス (生体恒常性) が働いていて、これは生体の内部や外部の環境因子の変化に関わらず恒常性が保たれるという機能で、健康維持に最も大事なものです。現代医学が行う手術や薬剤などの治療も、このホメオスターシスに依存しているのです。ホメオスターシスは、体温や血圧などはもちろん病原菌やウイルスに対する免疫にも関わり、傷の修復も依存します。私たちの尊敬するアブラハム・ホッファー博士は、この考えに基づいて精神や神経の働きも至適栄養と環境の中で治癒されていくという分子整合精神医学を唱えました。

現代医学は基本的に対症療法であり、その症状を抑え・なくそうとして薬剤や手術などを利用します。分子整合栄養医学では、その症状の原因がホメオスターシスを混乱させているものにあるかどうかを確認します。第一には分子を構成する栄養素の欠損、第二には分子の働きを阻害する物質の存在、第三には分子の働きを損なう特有な遺伝的体質、更に環境的要因も確認します。

「分子整合」とは、身体を構成する分子が至適栄養を保つならばホメオスターシスが働いて病気や症状が治っていくという考え方です。もし治らないのであれば、その「整合」を妨げる原因や物質があるはずなので、それを見出そうとして検査をするわけです。薬剤と違って、身体には殆ど支障はない治療ですが、一般の治療法よりもはるかに詳細な検査項目で、栄養状態、代謝を見るための検査、害となっているものがないかどうかの検査をしなければなりません。日本での検査は限られているので、アメリカの検査研究所にも依頼しています。そして、症状や栄養摂取前後の状態などを確認するために、ご家族の協力や理解が必須であり、それを打ち合わせるための医師や管理栄養士の指導や情報提供が必要です。実際の治療は、そういう面ではご家族にとっても、薬を飲んで済ませるというものではないために、多くの困難を乗り越える努力をしなければなりません。

一般的に「発達障害は治らない、症状を薬で抑えるだけ」とされています。日本のある地方では、「発達障害の進行を遅らせるための早期治療」として小学生に向精神薬を処方しようとしていることには驚きました。私たちは、精神科でも神経科でもなく、内科・小児科の医療機関ですが、分子整合精神医学の考え方から対応できるものもあるのではないかと診療を続けてきました。当初は、機能的低血糖症の治療を始め、血糖値の上下がホルモンの分泌と共に精神や神経に多くの影響をもたらすものとして治療を行ってきました。最近では、「血糖値の上下は身体に悪い」と普通に言われていますが、これは多くの反対を受けながらもマリヤ・クリニックが提唱してきたことですから、パラダイムシフト (一般常識の変化) と捉えています。このシフトが、精神病や神経症の治療などにも適応され、さらには発達障害の治療にも関わってくるようになることが私たちの願いです。

発達障害については、遺伝子の異常があるので治らない、ということも伝えられています。不健康な状態では遺伝子に異常がありうるのですが、遺伝子自体に修復機能があり、「分子整合」で治りうるということが私たちの見解です。OAT (有機酸検査) によって代謝物の異常がわかります。エネルギーを作り出すTCAサイクルの異常は発達障害の人に多く見られますが、私たちはそれに対処するサプリメントや消化酵素を必要に応じて用いています。神経伝達物質の異常などに対しても腸内環境の悪化による代謝物の影響もあることがわかったので対処できます。発達障害の人は腸内環境が極めて悪い人が多くおりますが、腸内環境の改善によって毒素や悪い影響をもたらす有機酸に対処することができます。重症の方や特別な症状の方は、それらを細かく対処しますが、基本的には一般的な腸内環境の改善によって多くの症状改善を確認しています。消化酵素の欠損している方も多くおりますが、当初はその消化酵素を経口摂取することによって改善し、栄養と体力の向上によって次第に消化吸収力が向上していきます。腸内環境が悪いということは免疫力の低さが伴うのですが、乳酸菌や食物繊維の摂取を通して改善すると、体力や免疫力も増加していきます。消化管粘膜の弱さもしばしば確認されます。サプリメントは、市販のもので成分や品質に不適切なものが含まれていることがあり、治療中は推奨するものを摂取するように指導しています。2年くらい摂取すると症状も改善するので、サプリメント依存率は低

くなります。経済的な負担は大きなものであることを覚悟していただかなければなりません、殆どの方は大きな改善を確認しています。

〔発達障害の症状をもたらす原因を探ります。〕

脳に明らかな器質的障害が見られなくても、ペプチド（タンパク質からアミノ酸に分解されていく過程の分子量1万以下のもの）の血液混入、アレルギーの影響、腸内環境の悪化、有害ミネラル、機能性低血糖症、神経伝達物質の過剰分泌、貧血その他の栄養障害などの内科的な異常がある場合、それが神経系の異常、感情的興奮、脳の働きの低下につながる可能性があります。

① ペプチドの影響で小麦や乳が精神神経症状を引き起こすことがあります。

腐った食べ物が身体に悪いことは誰でもわかりますが、お店に並ぶ一般的な食べ物が特定の人には悪い影響を与える、ということには気づいていない人も多いのではないのでしょうか。その代表的なものに、小麦や乳製品があります。小麦や乳は人間の歴史の中で貴重な栄養源として用いられてきましたが、それが近年、人によっては大きな害をもたらすものとなることがわかってきました。その原因が、小麦や乳のタンパク質から生じる未消化物（ペプチド）にあったのです。

タンパク質は非常に大きいため、腸で吸収するためには小さく分解（消化）する必要があります。その分解の途中で生じるタンパク質が小さくなった状態をペプチドと呼びます。タンパク質はあらゆる食べ物に含まれており、その種類も膨大な数があります。もちろんペプチドも様々なものがありますが、その中で精神・神経に影響を与える2種類のペプチドが分かっています。それが、麦に含まれるグルテンというタンパク質から生じるペプチドである「グリアドルフィン」と、乳製品に含まれるカゼインというタンパク質から生じるペプチドである「カソモルフィン」です。小麦や乳のタンパク質を分解（消化）する力が弱いと、これらのペプチドが体内に取り込まれやすく、やがて脳内に入り、ヘロインやモルヒネと同様の刺激を引き起こすことがあります。具体的には、脳でのGABA（γ-アミノ酪酸、精神や神経を安定させる作用がある。）の働きを抑制し、ドーパミン（神経を興奮させて高揚感や快感をもたらす神経伝達物質。過剰に分泌すると幻覚・幻聴・妄想が起こる場合もある。）の分泌を促すなど、脳の神経伝達物質のバランスを乱し、興奮を招きやすい状態にしてしまうのです。症状としては、幻聴や幻覚、妄想、感覚の過敏、激しい感情、強いこだわりなどに関わる可能性があります。

② 食物アレルギーの影響は蕁麻疹や腹痛だけではありません。

人間の体内では、病原菌など身体にとって有害な異物から身を守るために、様々な仕組みを備えています。その中で、抗体という武器を造り出して異物を排除しようとする免疫システムがありますが、これが敏感かつ過剰に反応してしまう状態がアレルギーです。食べ物や花粉など、本来は何でもない物質を敵とみなして過剰に反応してしまうことで、身体に様々な症状を引き起こします。例えば、花粉症で涙やくしゃみが止まらなくなるのも、異物を追い出そうという反応が過剰に引き起こされたものです。もちろん食べ物も例外ではありません。食べるとすぐに下痢や嘔吐・蕁麻疹などの急激な症状が起こるアレルギーがありますが、これを「即時型アレルギー」と呼びます。そしてこれとは別に、食べてしばらく経ってから体調を崩すアレルギーも存在します。このタイプを「遅発型アレルギー」と呼んでいます。例えば、慢性的な疲労や湿疹、うつ症状や興奮といった精神症状、下痢や便秘・消化不良といった消化器症状など、その影響は多岐にわたります。遅発型アレルギーは食べてから短時間で症状が出るとは限らないため、その場で原因を判断するのが難しく、その影響が長期にわたると、脳や神経にも悪影響を受ける人がいることもわかってきました。ただ、この検査はIgG検査と言い、日本ではその意義が知られていないために検査ができず、アメリカに検体を送って調べています。

③ 腸内環境の悪化は全身の健康に関わります。

腸内環境が良いか悪いかを決めるのは、私たちの腸に住む菌なのです。腸内に善玉菌が多ければ良い腸内環境となりますが、反対に悪玉菌が多くなると腸内環境は悪くなります。悪玉菌が増えると、腸内で有害物質を産生したり、臭いおなら、体臭、お腹の張り、下痢や便秘、免疫力低下の原因となったりします。有害な菌の中には、ドーパミンやノルアドレナリンなどの神経伝達物質に似た物質であるクロストリジウムという菌を造り出し、行動や神経系に異常を与えるものがあります。また、酵母菌やカンジダ菌のような真菌（カビの仲間）が増えると、腸壁を内側か

ら傷つけ、腸から悪いものを取り込まないようにするためのバリア機能や、必要な栄養を取り込むための消化吸収機能など、腸の本来の機能を損なうことにもつながります。

腸壁が傷ついている場合、前述した小麦・乳のペプチドや食物アレルギーのように、食品が身体に悪影響を及ぼしてしまう原因に大きく関わります。腸内に悪玉菌や真菌（カビ）が増えて腸壁が傷つけられてしまうと、傷ついた場所からまだ十分に消化できていない状態のタンパク質が漏出して、血液に取り込まれやすくなってしまいます。タンパク質は重要な栄養素ですが、未消化の状態では血液中に入ってしまうと様々な害を引き起こすのです。腸内環境を整えることは、これらの悪影響から心身を解放するための重要なポイントにもなるのです。

栄養や水分を摂り入れるのは口というよりも腸です。口では噛み砕き、胃では胃酸で分解消毒されますが、腸では身体全体の免疫細胞の7割があつて体内に取り入れる栄養物を確認し、有害物質がそのまま取り入れられないようにしています。そして、腸内には100兆個を超える細菌が存在して腸内フローラ（花畑）と言われる環境が形成され、消化吸収や免疫などに関わっています。上記のアレルギー誘発物や未消化物の吸収も、この腸内フローラの乱れが原因ですが、現代の食環境はこの腸内フローラの健全な形成及び保全には好ましくないものが多くあります。

発達障害の人には中耳炎の治療に長期間にわたって抗生物質を服用していた人が多くいて、幼児の頃に抗生物質の長期服用で腸内の善玉菌が極端に減少してしまったようです。対症療法が症状別になされると、中耳炎の治療には良いかもしれないけれど、身体全体のためには良くない治療がされてしまうこともあるようです。抗生物質は医学にとって画期的な効果をもたらしますが、その安易な服用は耐性菌をもたらし、また細菌には効いてもウイルスには効かないので腸内環境を破壊していきます。食生活で食物繊維の摂取が少ないことも腸内環境を悪化させます。乳酸菌を主とする善玉菌の摂取が少ないこともあります。

④ 解毒機能が低下すると有害ミネラルが蓄積します。

私たちの身体にとって、良いものを摂取することはもちろん重要ですが、それだけでなく、悪いものを外に出す、ということも非常に重要です。例えば、有害なミネラルもその一つです。有害ミネラルの代表的なものに、ヒ素や水銀、鉛、アルミニウムなどがあります。これらの有害ミネラルは体内に蓄積することで精神的・身体的に様々な症状を引き起こします。もちろん、大量に体内に入ってしまうと誰にでも害が生じることは明らかですが、呼吸をする、水を飲む、食事を摂る…など普段の何気ない行動を通して、どうしても微量の有害ミネラルと一緒に体内に入ってきてしまうのです。私たちの身体には本来、そういった有害ミネラルを解毒し排泄する機能がきちんと備わっているのですが、そのような「解毒機能」が低下していると、有害ミネラルを外に出すことができず、体内に蓄積させることになってしまいます。すると、疲労感や頭痛などの慢性的な症状や、精神・神経に悪影響を及ぼす原因となることがあります。このような体内の解毒機能が低下していることが考えられる場合には、解毒に関わる栄養素を強化したり、必要なミネラルのバランスを整えたりすることで治療を進めていきます。

(次回に続く。コロナの状況と対応策を載せる場合、翌月以降に繰り延べるかもしれません。)

※ この記事は、『発達障害治療体験集』kindle版、柏崎良子・柏崎久雄著 の一部の要約です。電子書籍としてアマゾンのサイトから購入することができます。¥1,100

＜ 診 療 時 間 ＞

月曜～金曜 (午前8時30分～11時30分、午後2時～5時10分)

土曜 (午前8時30分～11時30分、午後2時～4時半)

休診日 木曜、日曜、祝日、年末年始

- ・各種健康保険取扱機関
- ・生活保護指定機関
- ・介護保険取扱機関
- ・特定疾患取扱機関
- ・結核予防法指定機関
- ・自立支援医療機関
- ・身体障害者認定医
- ・各種健康診断
- ・小中台小学校校医
- ・栄養医学(分子整合医学)



(携帯サイトへ)